

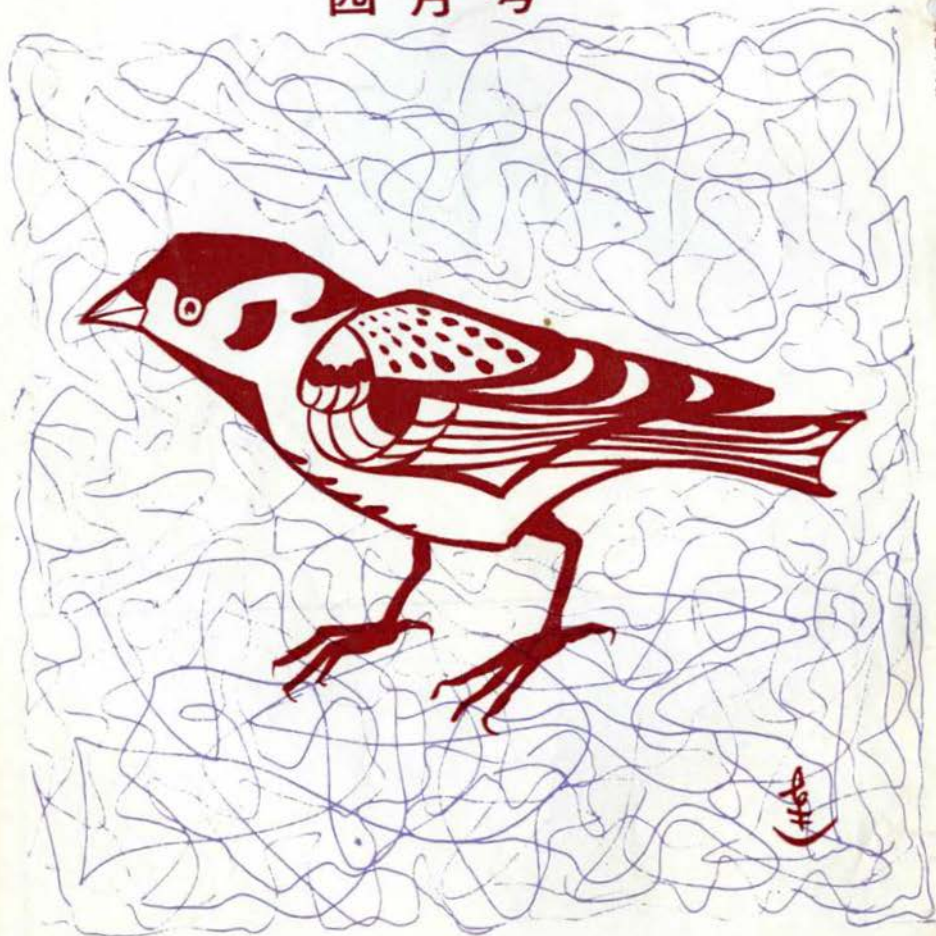
土 淨

四月号

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（別授承認雜誌）第三五二號
昭和四十二年三月二十五日 印刷
昭和四十二年四月一日 発行

第三十三卷

四号



法然上人鑽仰会



法悦心中
多邪念

管長 高階 璣仙方



法悦心中

無邪念

高階 璣仙
(曹洞宗管長)

別にこれは禪語でもない。いろいろなものを読んで私なりにまとめた考えの一つである。しかし、人間は悦んで生活しておれば邪念などおこることはないものである。



表紙「すずめ」松濤達文画

新旧花まつり

..... 佐藤密雄 (2)

和歌をいただく (5)

御忌会によせて お念仏のころ

..... 菊地謙雄 (6)

名士訪問 高階瓊仙禪師 (10)

身辺雑記

..... 石井真峯 (13)

新興教団探訪③ 世界救世教

..... 藤井正雄 (16)

お茶をおいしく 上手な番茶の入れ方

..... 三浦純亭 (20)

高僧夜話 親馬鹿

..... 鈴木成元 (22)

浄土宗のおしえ④ 三種行儀について

..... 柴田哲彦 (24)

中国見てある記

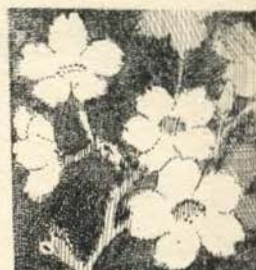
..... 白石広祐 (27)

連続
読書 みんなの法然さま・配流の師

..... 高橋良和 (30)

法然上人和歌

睡眠の時十念を唱ふべしといふ事を
あみだ仏と十声となへてまどろまむ
ながきねぶりになりもこそすれ





雄 密 藤 佐

花祭りが来た。四月八日はお釈迦様の誕生日であるのに、私共には、その前夜祭の四月七日が法然上人のお生れの日であって、両日ともに楽しい日である。

私は富山県の高岡市極楽寺で育った。極楽寺には、その頃誕生講という婦人会の集いがあった。当時は、婦人会のことを尼講といっていた。尼僧さんの集いでなく、婦人達の集いであって、お米一合と、何銭かの会費持寄りであって、十一時頃に集り、中食をして住職の法話をきいて散会するが、例月は会計の幾分の残金は住職への礼金となっていた。然し、四月七日は法然上人の生れ月の誕生日であり、また、お釈迦様の花祭り前夜祭でもあるので、多少会費も高くあったのか、黒豆の「おこわ」があって、それに「きなこ」を掛けて食べたように思う。当時といっても、四十数年前の頃、東京で漸く花祭りの盛んになろうとする時であった。極楽寺でも、この四月七日の法然上人の誕生講の日に併せて花祭りをしていたのである。講の食前のおつとめの時に、仏前の小さな盥に誕生仏を据えてあるのへ、甘茶をそそぐ行事があったが、花御堂がどのようにして飾られたか記憶がない。北陸の四月八日は桜に早く、極楽寺の境内に山椿が多く、その花が誕生仏を覆うように飾られていたと思う。然し町内の人がお寺へ甘茶を頂きに来たのは八日であった。またお寺では四月七日に、勅伝絵巻の掛物が本堂にかけられ、四月中それが掛けていたし、四月七日の尼講に住職がそれを絵解をしたので、これから考えると法然上人の誕生日に併せて花祭があったことになる。

このような寺に育ったので私は少年時代から小矢稚児の勢至丸様には親しんでいた。そのためか、この頃、京都へ行く毎に、華頂会館前の勢至丸様を拝するのを楽しみにしてい



新旧花祭に思ふ

る。

近年花祭りが各地とも盛大になって来た。お祭り好きの日本人の気性に、桜咲く春の最中、長い冬をすぎ、正月以来、春や春と待ちにまった花の開く時であるから、花祭りは実にびたりと来るものがある。然し、年々盛大となり、ことに都市の商店会と連合の行事化して来たことは喜びであるが、然し今、花祭りの方が次第に商店の売出しや観光祭のアクセラリー化する傾向がありはしないかと憂うのである。私が鎌倉で、今から二十数年前に花祭りを復活した頃は、荒廃した都市は花祭りを渴仰していた。華やかな衣裳の稚児行列、錦らの僧衣に取まかれた白象と花御堂は、春と共に開く日本の象徴のようにも見えた。当時鎌倉の花祭りは、ブッタ祭として外人にも知られ、ついに行列の行先の長谷通りから大仏までの行列は、人混みで歩いて五分の位のところを二時間もかかり、此処は数年で行列の通行禁止になった。

四月八日は鎌倉の花祭りというので外人も多く集ったが、人出が多くなると観光協会や商店会も乗り出すし、仏教会もどうせ行なうならば日曜ということになって、この頃は四月八日に最も近い日曜に行われることになった。ところが、そのことが徹底しない為もあって、四月八日広島や仙台あたりから訪ねて来る外人は、仏陀の誕生日は年々異なると聞く。例えばキリスト教のイースターは春分後の満月の直後の日曜で年々日が一定しないが、そのようである。彼等は、花御堂におまつりしてある誕生仏を拝しただけでは満足せず花祭りパレードを花祭りの本番と見ている。



さて、花祭りも、十年程前までは、華麗に見えて、商店会の人々も呼び物、パレードを主様なものにしていたが、今はどうだろう。ややだ勢で続いているようである。尤も横浜の孝道教団の花祭りのような、大資本をかけ大衆を動員するものは別である。出来たらこのようにしたいものであるが、今行われている地方の花祭りでは、稚児の衣裳も人を驚歎さす程に美しくもない。僧衣も露天では、堂内で見える程ではない。それも、くたびれた背広服に輪袈裟の半俗半僧が出動仏教僧の大部分では更にあじけない。これらの半僧達、平生は学校の先生で、たとえ、新調の衣に華麗な五条袈裟を着けさせたとて、はるえこの期待出来ない人々である。最早華美を誇ることは愚のようである。

最近梅原猛さんの「美と宗教の発見」を読んだ。その中に「明治百年に於ける日本の自己誤認」という章があり、そこに、明治以後、日本のインテリにもっともてはやされたのは禪と浄土真宗であったとされる一節がある。「私はこの選択も甚だ浅薄な理由で行われたのではないか」として、真宗の罪惡觀がキリスト教的であること、禪は西洋の合理主義の超克めいていること、それをするように浅薄に考えたからではないかとされ、その真を捉へたものでなかったとする。この新進の日本文化に対する創造的評論家の説からこの一句をそれだけで考えても私共に考えさすものがある。

花祭りの仏教側からの売りつけ方にも、観光協会等の受け入れ方にも、何かしら、本旨にそれた、浅薄安易なものがあり、その弊害が出て乗ってはいないだろうか。真味に四月八日だ、お釈迦様だと思わすような行事になりたいものである。そして貧弱とうずきたなく見えるようなことは早く避けたいものである。「誠意さへあれば」という時代ではない。

和歌をいただく

睡眠の時十念を唱ふべしといふ事を

あみだ仏と十声となへてまどろまむ

ながきねぶりになりもこそすれ

(勅修御伝第三十)

「まどろまむ」は、しばらく睡ろうよということ、「なりもこそすれ」はなるといふことを強めた言葉です。

このお歌の意味は詞書にある通り、「毎夜ねる前には南無阿弥陀仏とお十念を唱えましょう。そのわけは、この睡りがそのまま永い眠りとなるかも知れないからです」ということです。

このようにお歌の意味だけを拝見すると、このしばしの睡りが永睡となるかも知れないから、後で悔いないように必ずお十念を唱えなさいと警告しているようにとれます。しかしお歌のほんとの意味は、諸行無常であるから一刻も油断するなということであって、何

も睡る前だけに自分の生命について警戒せよということではありません。

誰でも夜早く睡ることは、朝早く起きてまた働くためです。熟睡は明日の活動に備え、その活躍を期待しているわけです。夜がすぎれば朝となり、再び元氣よく働くということは何十年かの経験で知っています。もし睡っている間に永眠するかも知れぬと心配するならば、もっと外に生命の危険な時はいくらでもあります。例えば往來を歩いても、自動車や飛行機に乗っていても、身の回りは常に危険につきまとわれています。

こうした意味から同じようなご法語に

「人の命は食事の時、むせて死する事もあなり。南無阿弥陀仏とみて、南無阿弥陀仏とのみ入るべきなり」というのがあります。これもやはり、食事の時が一番危険だから、食事中にお念仏を唱えないという意味ではありません。

食事をとっている時は、夜睡る時と同じように、一日の中で一番心の落つている時、一番心の和らいでいる時であります。それなのにこの時こそ最も生命の危険な時であると申されているわけではありません。お念仏は危

険に身をさらした時や、困って進退きわまつた時にだけ唱えるものでなく、行住坐臥において時と場所をえらばずに唱えるのであります。しかし特に一日の中で、最も心の静かな楽しい時である食事や睡る時には、必ずお十念を唱えなさいというのであります。

それなら何故「ながきねぶりになりもこそすれ」と詠まれたのでしょうか。それは他のご法語に次のお詞があることよって知ることができます。即ちそれは

「常に臨終のおもひをなして、臥すことに十念をとなふべし」

であります。心の楽しい時、落ちつく時にかえって油断をします。常にお念仏を唱えなさいと教えられた法然上人は、睡る前にこそお十念をゆつくりと唱えなさいと教えられているのです。法然上人のお姿、あくまでお念仏を唱えて「死生共にわづらひなし」の境地にあることです。われわれがお念仏を唱えるのは、少しでもこの境地に近づきたいと願うからであります。従ってこのお歌の意味は、朝起きて元氣一ばいに陽を仰いだときもお十念を唱えなさいということにもなります。

(村瀬秀雄)



◇◇御忌会によせて◇◇

お念仏のこころ

菊 地 謙 雄

建暦二年（一二二二）正月二十三日の斜陽は、ここ東山華頂の峯に淡い光を落している。異様な緊迫のただよう大谷の禪房の奥院、方丈には此の院の主、法然房源空上人が年始めからの四大不調が快方に向わせられず八十歳のご老軀を勢観房、善慧房、覚明房、法蓮房等上位の弟子達に看取られて念仏三昧に入っておられる。続く部屋部屋からは他の弟子達、信者の人達の助音の称名は、あの日から絶えることがなかった。

思えば讃岐配流ご赦免の後も入洛のお許しを得ず、摂津勝尾寺での四月のご投錫を経て建暦元年（一二二一）十一月十七日やっと懐しい此の禪房へお帰りになったのである

る。老いの御身を不自由な異境での生活がいたくこたえられたのか、翌正月二日から床に着かれて一切外出を止め、往生の一事のみを語られ六万遍の高声念仏だけを平日の通り相統しておられた。此度こそは往生の期が至ったと既に法蓮房や弟子達に

「跡を一廟に占むれば遺法遍からず予が遺跡は諸州に遍満すべし、ゆえいかなとなれば念仏を修せんところは貴賤を論せず海人漁人が苫屋までも皆これ予が遺跡なるべし。」

と、靈廟についての所見ものべられてある。宗義一切は多才な弟子達に平素心ゆくまで伝えてもある。思い残す何ものもない。ひたすら、ご来迎を待つのみのご様子であっ

た。

その時、勢観房一紙を捧げて

「念仏の安心起行については多年の御教訓を頂いているが重ねて最要をお遣し給え」

と御枕辺に伺候した。上人は筆をとられ世に名高き一枚起請文を記されたのである。

「……浄土宗の安心起行此の一紙に至極せり、源空が所存此の外に全く別義を存せず云云」

と、往生極楽のためには念仏を称えればよいという、生涯の化益を此の一紙に封じて滅後の邪義を防がんがために手印を押されて授けられた。

なすべきをなし、遺すべきを遺された上人の称名は、いよいよ高聲、いよいよ勇猛に弟子達の助音を越えて絶ゆることなく二十四日を過ぎ二十五日の朝を迎えた。小春日の太陽が東山に昇る頃、華頂の峯一面に紫雲がたなびいた。

これを眺めた都の人々は法然上人のご往生が迫った兆であるとして、大谷の権房に詰めかけた。憂愁の念堂に満ち宮廷から公卿ら見舞人は後をたたず、称名の声は東山にコダマした。

今朝は上人の氣力いよいよ衰え両眼は閉ち念仏の声も低聲と変り時折は吐絶えて只口辺の動きに称名の相続が知ら

れる。白無垢のシトネに頭北面西して臥し黒衣をまとい慈覺大師所伝の九条の袈裟を着せられて、しつかと合掌した臨終如法のみ姿は、悠々乱れず阿弥陀如来二十五菩薩の御来迎引接を待つ法悦境と云うべきか。こうして午の刻の迫る頃、突如、上人の御口から光明遍照の偈文が誦せられ、そして南無阿陀仏の一声を最後に息絶えられた。お顔の色殊に鮮やかに笑めるが如く口辺の動き十余辺、称名し続けておられたかのようにあった、と。

正に建暦二年（一二二二）正月二十五日正午、齢八十をもって一代の聖者法然上人は禪定に入るように入滅されたのである。

二

法然上人の御徳は四方を照し御化益は全国に普及した。

上人は贈位や僧階を望まず無位無官の平僧に過ぎなかったが後白河、高倉、後鳥羽の三帝の戒師となられたのを始めとして宮廷貴族、女房、武士等ひいては大盗耳四郎、愚人阿波介、室津の遊女等庶民に至るまで上人に入門して念仏生活を樂しみ往生でき得た人の数は知れない。殊にその門下から浄土宗二祖聖光、西山の証空、真宗の親鸞、或は長西、信空、源智、隆寛、金光等数多の名僧が輩出してゐる。よって、ご在世中、後鳥羽天皇から慧光菩薩の讃号、

滅後七回もの大師号及びその他の諡号を賜わり、辱くも勅命によって上人の御年忌を御忌（ぎよき）と称することになった。

三

法然上人ご出現以前の仏教は南都（奈良）六宗、高野の真言宗、北嶺ひえい山の天台宗などで、自分の修行によって成仏しなければならぬ。従って仏教教義を究めなければならぬ、出家戒律を守って完全如法の勤めが強いられる、俗界の生活を離れ山寺に籠らなければならぬというように難行で、特別の人だけが救われる教であった。法然上人は、仏教は誰れでも、いつでも、どこでも救われる易行の教でなければならぬ、という根本の御考えから南都北嶺すべての諸宗学匠を訪ねて学び、普く諸宗の聖教をひもといて道を求められた。学べば学ぶ程、修すれば修する程知識の奴となり、煩惱のとりことなる己れを如何せん。泣く泣く経蔵に入られて一切経を読まれること五回、遂に善導大師の「観經の疏」の——一心専念弥陀名号行住坐臥不問時節久近 念々不捨者是名正定之業 願彼仏願故——の文に眼が注がれた。

思えば三十余年の間、探しに探し、求めに求めた末法の時と機に相応した教えであり、父の遺討に報いる仏道が発見

されたこと喜ばれて、浄土宗を開かれたのである。時に承安五年（一一七五）春、上人四十三才の御時であった。

四

法然上人のご出現は決して偶然ではない。世は末法、源平両氏争い、残忍な復讐、斗争の絶えない時代であったればこそ、天は救世の師を、遣したのであらう。俗に「法然あたま」という、前頭部の間がくびれて二つの山形をなしている。これは非凡な叡智の骨相と聞く。大きく垂れた耳円満な大きな顔、御肖像に拝する御相好のいづこにも、すべてを抱擁する大慈悲と、たくましい勇猛心がにじみ出ておられる。

此の法然上人の天与の御人格を因として、更に上人を取りまく諸縁満足して一代の聖者の顕現となったのである。

崇徳天皇長承二年（一一三三）四月七日美作国（岡山県）久米南条稻岡庄で生れられた。父は漆間時国公、母は秦氏であったが、このご両親は信仰の篤い方で子宝の授かるよう、長年観音菩薩に祈念されていた。或る夜、母が剃刀を呑む夢を見て妊娠された。これは立派な戒師となる人の誕生の印だと喜ばれ、益々観音菩薩に供養礼拝を怠りなくつづけられた。ご出生のみぎりには白幡二流西面の棕の木にかけられ、紫雲れなびき鈴音がひびいたと記されている。こ

れらは漆間家の並々ならない篤信の賜であらうが此の母の信仰は力強く胎児の教育に影響を与えたことは云うまでもない。勅伝に「竹馬に鞭をあぐるよわいよりその性かしこくて成人のごとし。ややもすれば西の壁にむかいいるくせあり」と、又勢至丸（幼名）十五才の時勉学のため京都へ上り路上摂政藤原忠通公の行列に会われた。関白は勢至丸の非凡な姿を見て車を止めて礼を交わして行き過ぎた。後刻近習に「あのわらべは眼から光りを放っていた。ただ者ではない。そこで礼をしたのだ」と言われたとあるが生れながらの尊いご人格の現れであると思われる。

又父時国が明石の源内武者定明の夜襲を受けて、その深傷が因で亡くなる臨終に勢至丸を枕辺に呼んで

「汝敵をうらむことなかれ、出家して父の菩提をとむろ」と共に、敵味方共々救わる、道を求めよ」と、端坐して西に向って合掌念仏して眠るようになつたと伝えているが、真に当時の武門の家の将として非凡な存在であったといえよう。勢至丸は決して憶病未練の弱な少年ではなかった。夜襲にあつては九才の幼少にもかかわらず小弓を執つて定明の額を射当て証拠の残るを恐れて逃げ去らせた程であつたし、師の慧眼房に対して称名と観仏の優劣論争に一步も譲らず、山を降られるあたり、或は門弟住蓮、安楽

の事件に連坐されて四国流罪になられる時に、弟子達の諫めも聞き給わず

「流さるること更に怨みとすることはない。わしももう年八十に近い。たとい都で一しよに住んでいてもこの世の別れは近い、山海千里を離れても浄土の再会は間もない。まして念仏の興行も都では年久しい。此度びの朝恩によって田夫野人に教化する機会が与えられたことを感謝せねばならない。人が止めようとしても法は更に止まるものではない」と。なんたる広大な度量、正しきには死すとも進む大勇猛心というべきか。この師をしてホン然怨讐を超えて仏道修行のためひたむきに精進させた力は、この父の尊い遺言と此の家の宗教心の強い感化が天与の英才勢至丸を育て挙げたと思うのである。

法然上人の前にも、立派な教えはあった。然しそれは學者とか貴族とか非凡な求道者などの特別な階級の人たちだけが修し得る難行の聖道門であつた。法然上人の浄土門は仏の本願のお力に導かれて浄土に往生するのであって、すべてをおまかせして南無阿彌陀仏と、呼べばよいのである。たとえ愚かな者でも、貧しい者でも、身分の低い者でも己れの至らなさに目覺めて、お念仏を称えればよい。真に手軽な誰にも修せられる易行と云わねばならない。

(問)(訪)(士)(名)



曹洞宗管長

高階 瓏 仙 師



国会はなつとらん

「だいたいこの頃の国会はなつとらんね。派閥争いばかりしているからロクな仕事ができないんだ。」

対談の途中、突然激しい言葉がでてきてビックリした。いかにも好々爺のような禅師の目が鋭く光った。われわれには曹洞宗の大長老として、また仏教会の代表的人物としての禅師を考えていただけに、この語氣するどい政治批判に驚いた。しかし、これは決して不思議ではない。今年九十二才の禅師も、昭和二年頃、五十才の働きざかりには、宗会議長として政界に練腕(へらつわん)をふるっておられたこともあったのである。

「テレビなど余り見んね。第一芸能など好きでないしね」

いまや仏教界の長老として、仏教界を引きずっている禅師には、

テレビどころでないのであろう。それだけに、国政の黒い霧には、腹が立っているのに違いない。

曹洞宗管長待局は、中央線あさがや駅から程遠くないところにあった。禅師がこんなにもた家におられることは、記者にとっては不思議であったが、一宗の代表者として東京に居を占めることが必要ならとられている処置であると別所待局長は説明された。ガストロップの燃える一室で、禅師は少し遠くなった耳に手をあてながら、短い語句で、力強くお話しされた。

「以前お目にかかった時より、少しおやせのように見受けますが」

「そう。昨年、タイ国から帰ってから、糖尿病の気があるというのでね、脂肪のつかぬ努力をしたのでね」

それでも、とてもお元氣そうである。

今度は十万億土

「随分あちらこちらとお出掛けのようですね、殆んど世界をお廻りでないですか」

「そうでもないですよ。三十八年に核兵

器禁止を訴えにソ聯、ローマなどに行ったがね。まあ大分あちこち行ってきたね」

禪師の伝記を拝見すると、昭和二十五年セイロンでの第一回世界仏教徒会議、二十八年ハワイ、北米巡錫、二十九年ビルマへ戦跡慰霊、三十年南米ブラジル、三十三年、中国へと言った具合で、全く毎年のように海外御出張である。

「最近また何処かへお出掛けで」

「さあね、今度は十万億土じやないかね」
そう言って呵呵大笑された。禪僧の風格をここに見た。

「国内でも、あちらこちらにお出掛けの様ですが」

「それがね、大体曹洞宗では、管長、永平寺、総持寺貫主の三人で地方巡錫することになっているんだがね、永平寺貫主は九十五で一寸無理、総持寺貫主は八十八だが少し足が悪くてね、止むを得ず私が出掛けることが多くなるんだね」

全く驚いた話で、気の遠くなるような話である。記者などは、これらの禪師からす

れば子供みたいな年で、長寿部落の話を聞いているような錯覚に促われた。

素食少食、腹立てず

余りの長寿話なので、一つ秘訣でもないですかと聞くと、

「みんな聞くけどね、別がないね。それでも、もし言って欲しいなら、こんなところだね。」

そう言いながら、調子よく一句を出された。

素食 少食 ほがらかに

感謝で暮せ 腹を立てるな

成程と、感じ入るばかりであった。

禪師は明治十年、福岡県の碓井町に生れ、十五才で得度、高階黙仙和尚の弟子となられてより、このかた、時には学僧として、時には政治家として、そして、いまや一宗のみならず、全仏教界の代表として、世界を股にかけての活躍である。いうまでもなく独身である。たまたま談この事に及ぶと、

「女房がいらないと、不便は不便だね。この年になるとね。そうかと言って、今時来てく

れる人もないからね。ハハハ……」
全く、老子の無為自然を地で行っておられるような話である。

「しかしね、僧侶が女房を持つようになった原因は、確かに仏教にとっては墮落だね。家族が出来る、生活を立てねばならず、思うことはできないね」

それでは、仏教者は独身であることを特に説かれるかただすと、

「いや、無理強いはいしません。もうそういう世の中になっているんだからね。まあ適当にやっているんでしょうね。それでも禪宗などでは、独身の人もまだいますからね」

黒田真洞にも学んだ

禪師は明治二十九年、今の駒沢大学の前身の大学林を卒業して、宗門内留学生として京都に学ばれた。

「今まだあるかね。鹿(しし)ヶ谷にあった浄土宗の大学。」

「あれは、今北区に移り仏教大学と言っています」

「あそこでね、黒田真洞さんに唯識を学んだんだがね。黒田さんと言えば、随分立派な人だったね。」

いかにも感慨深げに話された。黒田真洞と言えば、今の人には余り知られていないが、明治の浄土宗を背負った人として、渡辺海旭先生と共に、忘れることのできない人の一人なのである。浄土宗の先輩は、他宗派の人々にも大きな影響を与えていることを知って、記者は感慨深く聞いた。

睡るべし

禪師は、いま静岡県袋井市にある可睡斎という寺の貫主でもある。前々住の日置黙仙禪事に師重しておられた縁で、此処に住持となっておられる。可睡斎と言えば、ここに火伏の三尺坊威徳大権現が祀られておること、余りにも有名である。しかし、いかにも名前が不思議なのでたずねると、この寺は、もと東陽軒と言っていたがね十一世仙麟^{せんりん}等^{どう}が、徳川家康の幼少時、今川家に人質となっていたのを助けたことが

あってね。家康がその地位を得てから浜松城に等膳和尚を招いて慰勞したことがあったのだ。ところが、和尚、旅のつかれて居ねむりを始めたので、家康が『和尚、睡る可し』といたわった。そこで、東陽軒の寺号を改めて、万松山、可睡斎としたのだ」

なかなか面白い、しかも禪僧らしい話である。権威者の前に出ても臆せぬ等膳の話は、高階禪師でもやりかねないと、記者はほえた。

色紙を兼ねて頼んでおいたので、別所局長が、持ってきて下さった。「法悦心中、無邪念」と、軽いタッチで書かれていた。同行の長谷川記者のために、更に一枚持ってくるように命ぜられたので、又一枚頂いた。包装紙に入っていたので、そのまま頂いて、座を立ち、お別れしたのであるが、帰途の車中、そっとあけてみたら「洗心」と書いてあった。全く禪師と会って心が洗われた感じがした。車窓外の雨もあがって、春の日ざしが町の洗われた屋根を、やわらかく照らしていた。

(安居香山)

書評

『死の対話』

われわれは余りに軽々に死を語りすぎるのではなからうか。本当に死を語り得るものは、死に直面した者か、死を真剣に考えたものしかできない筈である。

『死との対話』というこの本は、本当に死を自己の相手として、自己自身に対話している人々の記録である。ガンに犯されて、死を予告された高見順、自から命を絶って行った芥川竜之介、死刑に直面した和田久太郎、戦陣で、日々死に直面していた田辺利宏、そして彼は間もなく戦死した。逗子海岸に入水自殺した原口統三、どの人々の文も、それが観念的な死の考察でないだけに、心打つものが多い。

勿論、それだからと言って、切角に与えられたこの尊い生命を、そんなに軽々にあつかってよいとは考えない。ただ、われわれは、日々、死に、直面している者である故に、せめてこのことだけは、自分の問題として考えた。

一 気軽に挨拶を

日本の旅館にも捨てがたいところがあるが、さわがしいのと、暖房設備が十分でないところが多いので、寒い冬、旅行をする時は、洋式のホテルを利用する。静かでないと思えないし、その上、寒がり屋でどうしようもない。仮りに私の部屋が五階にあるとする。朝、一階へ降りるためエレベーターのボタンを押すと、上から来るエレベーターがとまりドアが開く。先客に外人がいると、多くの場合ニコニコして「お早よう」と挨拶するので私も「お早よう」と答礼する。ところがそれが日本人の場合はほとんど何も言わない。こちらから「お早よう」と挨拶しても、反応がないのが普通で「余計なことをいうな」と言わぬばかりのことが多い。エレベーターへ外人と乗り合せ「何階ですか」と尋ねてボタンを押してやると「有難う」という。時には、かたことの、しかしあいさつのようなある日本語で話しかけて来る。エレベーターへ乗る時、降りる時、鉢合わせをすると、外人は必

身 辺 雑 記

石 井 真 峯



ず「失礼」という。こういう場合、日本人は多くは無言である。

日本人の悪口を言っては申し訳ないと思うのだが、なぜ我々にはこういう人づきあいの悪いところがあるのだろうか。「人を見たら泥棒と思え」という考えが長い間我々を支配して来たようだ。そういう言葉はもうあまり使われなと思うが、試みに和英辞書の「泥棒」の項を引いて見たら、ちゃんと掲載されていて、その英訳に「見知らぬ人を信用するな」とあるのは少々意外であった。

ヨーロッパでは国と国とが隣り合っていて、長い間国際的接触が多かったということ、社交性を養うために役立ったのに、日本は島国であり、また長く鎖国をしていたことが「人を見たら泥棒と思え」という思想を生んだのだろうか。アメリカは国としては若い、長いヨーロッパの伝統を持っているので、特に社交的で、開放的であるようである。

二 三つの不思議な言葉

昨年の暮に近い頃、ある東京の新聞の投書

欄に「三つの不思議な言葉」というのがあった。ある会社の社員の投稿で、この人がニュー・ヨークへ出張、滞在中、地下鉄の広告に「三つの不思議な言葉」があつて、日常生活に「ありがとう」「ごめんなさい」「すみません」の三つの言葉をもっと使つて社会生活を明るくしようというのであつた。この人は大変共鳴して日本へ帰つてからも、社の内外でこの言葉を人にもすすめ、自分もつとめて使つてゐるとあつた。この三つの言葉を使うと不思議な作用が社会生活や、人間生活に起るということから「不思議な言葉」というのだと私は解釈した。

自分のことを言つては甚だ恐縮であるが、私は新聞配達少年にも、郵便屋さんにも、タクシ一の運転手にも必ず「ありがとう」と言うことにしている。駅で切符を買つても、デパートや一般商店で買物をして同様である。街かどで鉢合わせすれば「失礼」という。人込みの中で体が当たっても「失礼」という。昨夜新聞を読んでいたら早大名誉教授で学士院会員の青木楠男氏が『いま世間では』小さい親切運動』というのがありますが、私は

この運動に應ずるために「ありがとう」運動を提唱したいのです……。昔はもつと「ありがとう」「すみません」というようなことが、車の中や町の中で聞かれたと思うのです」とあつて私は嬉しく思つた。仏教タイムスはずでに昨年あたりから石橋湛山氏、安川第五郎氏の提唱で「ありがとう運動」を推進し、毎号その記事を載せていたが、更に多くの人にこの精神が生かされることを心から望む。

この世にあるものでひとりぼっちで存在するものは一つもない、諸法は無我であるといふ仏教の根本思想からすれば、当然、日々の生活に對し感謝の心持ちを抱き、人にも物にも「ありがう」と言えなくてはならないのであるが、今の世の中はこれとは逆なことが多い。「お陰」とか「生活させて貰つてゐる」などという考えは少なく、人のものを取りう、取ろうとしているかのようであるが、こういう考えかたを清算しなくては、人間社会はついに亡びてしまうのではあるまいかと心配されるが、それは老人のねごとか。

三 勤行式に真と番号を

お寺や檀家で営まれる法要の折、各宗ともお経を棒読みにしてゐるところが多いと思ふ。何人かの寺院がそろつて読む棒読みのお経には一種のリズムがあり、不調和の調和といふような、いいところがあるのは事実だが、それにしても意味のわからないお経を、しびれをきらして、四十分も五十分も、時に一時間半も聞かされてはさぞ参列者もたまらないだろうと同情する。昔は棒読みをされても阿弥陀經や觀經などの意味がわかつた人が少しはあつたと思うが、今日は例外を除いては、全く理解しかねるであらう、それなのに浄土宗勤行式などもほとんど昔のままの棒読みになつてゐる。四響偈だけは和訳がついて読まれるが、これも現代の日本文にしなうと理解が困難であらう。私は自分だけで檀家の回向をする場合は、しばしば初めから終りまで、和訳で拝読する。参詣の人にも出来るだけ一緒に読み下さいとすすめることにしている。

そういう場合に使う、本屋や団体から出版されている動行式にはほとんど頁と番号がそろっているものはない。これは在家の人には全く読んで貰うことを考えていない証だと思ふのはどうであらう。一枚起請文と小消息を同時に読むことはないで、一方を省略しますとか、「十一番は省略します」とか言えはつきりする。途中から法要に参列する人があつた時は「只今何頁の何番です」と言えはその人もすぐそこから一緒に読める。自分で自分用の便利な動行式を印刷したいと思つていて多年になるが、まだそれが出来ないで、本屋から買った動行式へ赤鉛筆で番号をつけて使っている。これから出版される動行式には必ず頁と番号をつけて貰いたいものである。

四 英文仏教理典

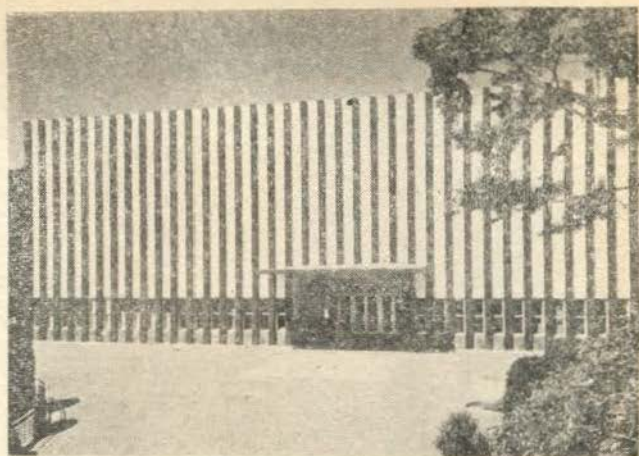
昨年の八月横浜の孝道教団の開宗三十周年の記念祝賀会が同市のホテルで催され、ご招待を受け、久しぶりに岡野統理、副統理ご夫妻にお目にかかり、短かい間にすばらしい発

展を上げ、正法興隆のため尽して居られることに敬意と祝意を表した。

その機会に同市に住む旧友の氏を訪ねたがいにく旅行中で会えなかった。しばらくしてその友人から手紙を貰つたが、その中に友人が旅行中神戸のあるホテルへ宿泊したところ、英文仏教聖典が備えてあつたと知らせて来た。私はその手紙を読んで非常に喜んだのである。というのはこのホテルの部屋にも和英のバイブルは備えてあるが、仏教国といわれる日本でありながら、仏教聖典がないということはまことにおかしいことだと思ひ、一九六二年に東京で開かれた仏教東漸七十年記念文化会議の折、私は日本のホテルに英文仏教聖典を備えつけるよう提案して議決されているからである。友人の手紙を貰つてから、毎週利用している名古屋のホテルのひきだしを開けて見たら、英文仏教聖典と論語とバイブルが入っているのを見て「なるほど」と思ひ喜んだことである。

ところが、この原稿を書いている最中に先程述べた友人から再び手紙が届いた。その中に二月三日付の日本経済新聞の切り抜きが同

封してあつた。「世界中に仏教聖典」といふ一文で「精密機械売って伝道資金づくり」の副題があり、筆者は三豊製作社長の沼田恵範氏である。沼田氏は広島島の寺の三男として生れ、京都の平安中学（現平安高校）を経てカルフォルニア大学卒業の方である。その一文のなかに「この仏教聖典は私どものやうにしている仏教伝道協会が、日本に来る外人のため、仏教を理解させる一助として、仏典の粹を英訳したので、各ホテルにお願いして置いてあるものだ」とある。沼田氏の理想が実現して、全世界の多くの人が、大乘仏教を理解して、仏教が真の国際理解と真の世界平和のために役立つ日を期待したい。最後になって申訳ないが、この英文仏教聖典は沼田氏の寄贈により、出版したもので、一九六二年の秋、アメリカの各地で日米仏教文化会議が開かれた時、数百部を持参してアメリカ人に配布したものであることを記し同氏に感謝の意を表したい。なおこの聖典は仏教協会代表木津無庵師編の「仏教聖典」（昭和七年発行）の英訳であると記憶しているが、まちがいであらうか。但しごなたの英訳であるかを知らない。



病・貧・争絶無の

地上天国の建設をめざす

世界救世教

藤井正雄

霊頭あらたかな「浄霊」

もう六、七年も前の話ではあるが、川越のある名刹に、戦後から霊守をつとめていた吉田丹兵衛という名物男があった。仏教学院の講義をうけ、「観音経をよむ会」の熱心な仏教信者であったというが、ふとしたことから世界救世教に入信していた。自室にこもっては、寺側にかくれてひそかに教祖の渠筆八光明Vを掲げておがみ、参詣の人々には掌をさしだして「浄霊V」をほどこしていたという。世界救世教では、掌から発する霊波は病をいやし、貧乏も争いもなくなると教えているが皮肉にも吉田霊守のさしだす「浄霊V」の奇蹟が人の口から人の口へと口コミで伝えられ、寺への参詣人がかえってふえたという珍現象が起った。また、僧籍をもつある大学教授は、医者に見放された眼病が「浄霊V」をうけてピタリと治ったという話がまことしやかに伝えられたこともある。

一般にひとは、世の中には特異な霊力をもった人がいる。吉田霊守はそんな部類の人であらうと簡単に片づけてしまうかもしれない

い。たしかに、吉田老にはそんな一面があったことが伝えられている。たとえば、吉田老

があるとき、参詣人の顔をまじまじとみつめて、あなたはその物を盗まれる相がでているから注意しなさい、といった。やぶから棒にそんなことをいわれた参詣人は、そんな馬鹿なことが、Vと一笑に附した方がいいが、さて帰り際、境内においた自転車を実際になくなっていて、顔面蒼白になったという話が伝えられている。また、吉田老は死ぬ前日、入院の前に川越市内が見たいといつてリヤカーに乗って市内を見物し、次の日、病院の一室で永眠したのであるが、自己の死期を悟ってか、自室の荷物はすべて片づけてあったという。

このようないくつかの逸話をのこして、今は上野谷中の通称「吉田寺」に葬られているが、たしかに特異な人であったことはまごうことのない事実である。

しかし、世界救世教では、浄霊Vは特別な修行をすることなく、吉田老でなくとも誰でもかたんに修得できると教えている。では、浄霊Vとは、また世界救世教とはどんな教

団であらうか。

教団の発展は非難と嘲笑の渦のなかで

世界救世教ほど、非難と嘲笑の渦のなかで発展した教団はないであらう。救世教が一躍世上に噂されるようになったのは戦後であるが、その発生は戦前にさかのぼる。教祖岡田茂吉氏は、明治十五年十二月二十三日東京浅草の生れ、大正九年の経済恐慌を期に実業界を退いて、大本教に入信、大正末期には中堅幹部として活躍した教団は、昭和九年神示をうけて自己の使命をさとした岡田氏が大本教を脱退、東京に応神堂をひらき、翌十年、宗教結社「大日本観音会」を設立して、岡田式神霊指圧法Vという信仰療法をひろめはじめたことに、その歴史がはじまる。

大日本観音会はその後急速に信者を集めていったが、翌十一年には医師法違反で弾圧をうけ、「大日本健康協会」と改めて再出発後、二度目の弾圧で、施療一切まかりならぬと誓約書までとられて、教団は事実上解消してしまった。

しかし、その後、治療師の養成につとめて

いたところ、今次大戦がはじまるとその病術のききめと氏が、光明Vと書いたお守りが霊顯あらたかだという噂が噂をよんで知名人のなかにも信奉者がでて、終戦のときにはすでに新教団設立の礎がきづかれていた。ちなみに昭和十九年には現在箱根美術館となっている神山荘を十六万円で、また、現在教団本部と熱海美術館のある東山荘を七十万円で買われ、その財力は、すでに終戦時にはかなりの事実上の信者がいたことを物語っている（『戦後宗教回想録』六六頁）。

戦後になり、八信教の自由Vが認められると、昭和二十二年、「日本観音教団」を結成、掌から出る霊波——浄霊Vによってすべての病気をなおす宗教として発展する。一見して奇抜な教えは、昭和二十三年十月に教祖が脱税容疑で送検されるにおよび、マスコミの紙面をにぎわして一躍有名になり、世上の矚目をかい、ごうごうたる非難を浴び、ハインチキ宗教Vの名をほしいままにした。しかし、世上の攻撃にもかかわらず、かえってその霊験が喧伝されて、信者は急速にふ

え、二十九年には日本観音教団および五六七教会を合せて「世界救世教」となったときには、会員十万余を数える教団に成長していた。

同年五月には再び脱税事件で教祖に有罪の判決をうけたが、いぜんとしてそのはなやかな発展の歩みを止めなかった。教祖は昭和三十年二月昇天、現在、教団の名称の呼び名は「世界メシア教」から「世界キユウセイ教」にかわり、第二代教祖があとを継いでいる

が、熱海の本部のほか、北海道、四国、九州にそれぞれ地区本部を、各都道府県に教会八二、支部布教所五〇四をもち、海外にはアメリカ、ハワイ、ブラジル、沖縄に宣教本部、教会、布教所三二を数え、教師一、七〇〇名、信者六五万に及んでいる（数字は二月三日現在、教団側の報告資料による）。

霊肉一致の真理と地上天国

教団の教典は「天国の礎」、「祈りの架」で機関紙に「地上天国」（月刊）、「栄光」（旬刊）がある。これらの資料から教旨を窺ってみよう。

世界救世教は祭神として世界創造主たる

大光明^{ミロクオミ}真神を奉斎する。教団の設立は大光明真神が混沌としてその帰趨を知らぬ世界情勢にかんがみ、教祖を通じて真理を明かし、教祖に救世の大任を下し給うたという神意にもとづいており、その目的は神意を奉じて地上天国の建設がめざされている。地上天国とは、病・貧・争の三本災厄を根絶したところに開かれる真、善、美の兼ね備った理想世界、平和幸福な世界をいう。

「神は一切の万物を人間のために造り、また人間をして神の代行者とされた。」「本来人間というものは、神様の御目的たる理想世界を造る役目で生まれたものである以上、その御目的に叶うようにすれば、いつも無病息災愉快に働ける。これが不滅の真理である。処が何しろ祖先以来の罪穢があり、又生まれてからも、本當の事を知らないが為毒をやたらに入れるので、その為反って病氣を増す事もあるが、これも止むを得ないのである。併し神様は、お役に立つ人が病氣の為働けないとすれば神様の方では損になるから、速かに治して下さるのは当然で何等心配はないのであ

る。処がそれを知らない人達は、薬を唯一のものとし、病氣を抑えるのみであるから、全く霊体一致の真理に外れており、完全に治る訳には行かないのである」〔天国の礎〕五二—五三頁。

ここに引用したなかに、薬のへい害から一切の薬をのまないで病を治す薬毒説——現在ではあまり強調していない——、肥料を一切ほどこさない自然農法の根拠がはつきりするであろう。

自然農法とはパンフレットによると「これは、今までの農法のように、耕作技術や化学肥料にたよりすぎるのではなく、自然本来の姿やその在り方を手本として、土自体の力をもつ力を強め、大いにその力を発揮させて、清浄で美味な作物を豊かに生産しようとするもの」〔世界救世教案内〕で同じ論理から展開されている。

その根拠は「人間の体は現界に呼吸しており、霊は靈界に生きている以上、靈界の状態がその體身に影響し、それが肉体に映るのであるから、人間の運命のその根本は靈界にあ



箱根神社 箱根美術館

るのである」(「天国の礎」五七頁)。すなわち世界救世教の教旨は霊肉の一致にある。たとえば、薬にしても、肉体のみにかかわって霊そのものを放置しておくところにアンバランスが生じてくるのであり、病が生じ、貧も争もおきてくることになる。霊肉一致の手法は、冒頭にあげた吉田老の話にあるように、霊顯あらたかな『浄霊』に求められることになる。浄霊の奇跡は現在、ブラジルに

まで及んでいるという。藤枝前管長の話によると、リオデジャネイロでは浄霊を受けに三千人もの理地人が行列して並び、現地警察の注意を受けたほどで、押しよせる信者をさばき切れないほどであるという。

宗教協力の強調——宗教は「和」にあり

救世教の教義には明らかに、仏教、神道、キリスト教の折衷がみられる。教団にとって、神道はタテ、仏教はヨコの関係にある。

藤枝前管長の話によれば、「梅は梅の花を咲かせるように、仏教には仏教によって救われる人がいる」。要は信仰と無信仰の対決にあるのであり、教団とあらゆる他の新旧教団とは共通の基盤にたっている。教祖は「人を邪

神という人こそ、実は御自分に邪神が憑いているのである……そういう人は人間の分際で神様の地位を侵しているようなものだから、飛んでもない慢心脱線である」(「天国の礎」四〇頁)と述べているように、神意に自己を委ねたときに信仰の世界が開かれることから、一切他宗の攻撃はしないたてまえをとる。当教団は新宗連加盟の教団であり、前号にも

述べたように新宗連は対創価学会の姿勢を打ちだしているが、創価学会に対して、左記に述べた理由から同じ信仰側になつて批判はしても攻撃はしないという。

救世教はこのようにして積極的に宗教協力を強調する。既成教団側に対して積極的に宗教協力を強調する。既成教団側に対しては、日本宗教連盟の会の席上では、あまり宗教協力の実をあげていない。それは意志の疎通を欠いているからで、もっと救世教を知ってもらいたい。そして、先ず各教団の頂上会談から始めて貰いたいと、たまたま大正大学の浄土宗関係の教職員の一行と訪づれた席上でくり返し強調していた。

次回は、天台宗の僧籍をもち、天台・日蓮両教を兼味した人在家道Vをめざして、岡野夫妻によって設立、国際的にも活躍のめざましい「孝道教団」を訪れる予定である。

お茶をおいしく

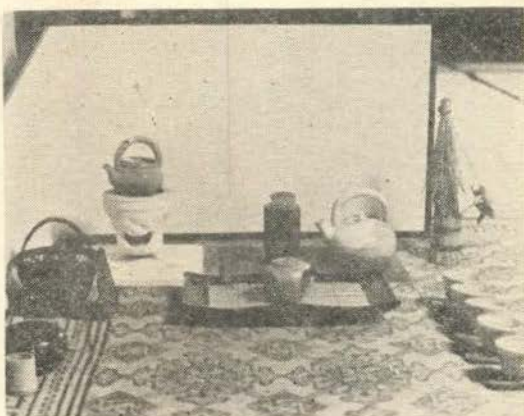
その4



上手な番茶の入れ方

黄檗幽若流家元

三 浦 純 亨



一般御家庭で食後に番茶を召上りますが、この番茶は八十八夜以後三番茶、四番茶とつまれる、七月、八月頃の大量のお茶で、このとき茶も成長し、風味もうすれ、製法も安易にされますため、お値も安くなります。

よく町をお歩きになりますと、茶舗の店頭からこのお茶をほうじる香りが、なんとも申

せぬ気分になさしてくれます。これを焙じ茶と申します。この焙じ茶をお求めになりまして、其のまま熱湯で召上りますが、更においしく入れます方法は、召上る直前に一度軽く焙じ直されると、一段と風味がよろしゅうございます。又、番茶をお求めになりました時も、煎茶の様に熱湯でそのまま召上りましてもあり風味はございません。やはりこれもいただきます前に御家庭でそのつどつどに焙じられますと、大変美味しいものでございます。

其の焙じ方は、石綿の焙じ器がよろしゅうございますが、御手許になれば折箱の底を抜きまして、美濃紙を貼ってお作りになっても面白いと思いますし、又、この手製の焙じ器は、仲々上手に焙じられますので是非一度おためし遊ばして。

いり方は、炭火でしたらとろ火がよろしく、ガス火でしたらば、石綿の金網に火を防ぎながら左右に静かにゆり動かしながらおいり下さいませ。いり加減は、ほのかな香りが出てきつね色になりましたらよろしゅうございます。保富良で沸きましたお湯を土瓶に移し替

えてお茶を投じ、更にとろ火にてむらす気でおかけ下さい。お茶の量は一合入りの土瓶に大さじ山盛り一杯が適量です。

これも一煎に止めて頂きます。所望されまして更に新しく入れ替えてすすめましょう。御主人様が夕方お帰りの時分をみはからわれて焙じられますと、その香りが何とも申せぬ家庭的ふんいきをかもし出し、「ああや」と、我が家に戻った」というやすらぎを感じさせてくれます。又、御病人のおありの御家庭では上茶を焙じて差し上げて下さいませ。上茶にはビタミンが多く含まれておりますために。

ついでに御注意申し上げますことは、お菓子を召上りますので、お茶と菓を同時にお飲みになりませんように。お茶には色々な成分を含んでおりますので、重曹、チアスターゼー、ホシカチンキ、睡眠剤に変化作用を起しまして効果を失いません。如何なる菓を召上りましても二十分位時間を経過すれば差し支えございません。

又、宵越のお茶は毒であると云われます

が、葉茶にあります蛋白質はお湯にとけず、茶かすの中に残され長く置きますと腐敗し、有毒物に変化するからであります。急須の茶殻は完全に洗い落として置くことが肝要です。又、空腹時には濃厚な上茶を飲みますと、胃液の分泌を阻止し食物の消化を防げますので、なにかを少しでもおつまみ下さいま



せ。この点焙じ茶は空腹時にも害はございません。

番茶の器は、煎茶器よりやや大ぶりの民芸風の厚手が合います。

お菓子は軽いせんべいやお駄菓子のようなものです。

たとえ番茶だからと申して安易になさいませず、お茶卓をお使い下さい。見た目も美しくテーブルに糸底の跡が付きません。



折玉と申して、抹茶の薄葉を取ったあとの折を求められて、これを焙じしても大変風味がよろしゅうございます。茶輔には、余り置いてございませんで、前もって注文いたしますと産地から取り寄せてくれます。

番茶はいつも「熱いうちに、あたたく」と言うお心をお忘れになりませんように。

お寒い時など、たとえお玄關先のお客様でも、はしづかで失礼ですがと家で焙じました一煎でもおすすめしますとその家のあたたかさ

親馬鹿

鈴木成元

「ひのえうま」が明けたことし、出生数はここ十余年来の最高を記録したそうだ。デパートのベビー用品売場は出産をひかえた婦人客でにぎわい、メーカーもブームを当てこんで皮算用にいそがしい。ベビー商戦は、いよいよたけなわになろうとしている。

柄にもない書出しであるが、私のところもその一つ。家内の腹は月毎に目立ち、男だろうか女だろうか、名前は何とつけようか、などと相談されても、無責任な私にはそれほど実感はわかなかった。ところが今月に入ると、唯一の楽しみにしていた父の晩酌がブツ

ツリととだえ、一滴のアルコールも飲まなくなった。母は疲労した体で目をショボツかせながらも楽しそうにオシメを縫い、ドライブ好きな弟は車を整備して外出をやめた。こうなると螢光燈の私も事の重大さを感じはじめた。今までより以上、何の抵抗もなく、お地蔵様に足がむいていった。

昨日早朝、無事男児出産と病院から電話。安心と同時に、どっと疲れが出た。正直のところ何となく心配でウツラウツラとしていたところだった。つい今まで、男でも女でも、五体が満足であればと願っていた矢先。ところが、男だといわれてみれば、ああ男でよかったと胸をなでおろした。そして、つくづく勝手なものだと苦笑した。

早速病院にかけつけた。気のせいか昨日まで堅苦しかった院内も明るい。先生も看護婦も「おめでとう」の連発。やっと親子の対面。何とはなしにテレくさい。彼氏はそんなことおかまへなし。大アクビをしてまたスヤスヤと眠り込む。私は子供を何と呼んでよいのか方法もしらず、家内と子供を見やりながらだニヤニヤ。

私はかつて友人の新生児を見舞ったとき、みっともない児といってしまう、お目玉をくらったことがある。はれぼったいまつかな顔でギャアギャアなく姿は、冷静に考えればお世辞にも可愛いとはいえない。ところがわが子は格別。無心に動かす口や手。大声で泣いても楽しい。時間のたつのがわからない。こんなに可愛いものだろうか。まさに親馬鹿とはこのことであろう。

文祿四年（一五九五）七月、豊臣秀吉は突然石田三成らをやって、甥の秀次から関白職を召上げ高野山に追放して切腹を命じた。謀反の企てをしたという理由である。そればかりでなく、残された秀次の妻妾子女ら三十九人を車に乗せて京都市中を引きまわした後、三条河原に引き出した。河原には鹿垣（しかがき）を結びまわし、三間の塚を築いて秀次の首を西向きにすえた。垣の中に引入れた一同に秀次の首を拜ませ、やがて一人一人首を刎ねていった。荒くれ男たちが可憐の若君を犬の子を割くようにしてゆく。覚悟をきめていた母親もそれを見て泣きくずれる。それをまた引立てて首を斬る。見物に来たものどもも今さらの

ように肝を消し、こなければよかったと後悔したという。

これは秀次の謀反ということになっているが、真実の理由はそんなところにはない。天正十七年（一五八九）秀吉は五十四歳で淀殿の間に鶴松を生んだ。はじめての子であり、すべての幸福を鶴松に与えようとした。そして幼児が無事に成育することを願って、当時の迷信をも取り入れ、人々に棄（す）と呼ばせた。

豊臣秀吉肖像（逸翁美術館蔵）



また武運がめでたいようにと願って八幡太郎とも呼んだ。鶴松というのもやはりめでたい文字を合せたものであった。

秀吉は幼児の鶴松を大人あつかいにし、諸大名たちにも礼儀をつくさせた。しかし鶴松は同十九年八月、二度目の病氣にかかった。秀吉は畿内や近畿の諸社寺に祈禱をさせ、医術のかぎりをつくしたが、そのかいなく、八月五日わずか三歳で死んでしまった秀吉は氣が狂ったように落胆した。日毎に思慕は増し、悲傷は深まるばかりで、鶴松のことを夢に見ては炬燵の上に涙を落した。

もう子供ができないと覚悟した秀吉は、この年関白職を秀次に譲った。ところが文祿二年（一五九三）八月、淀殿との間に秀頼が生まれた。甥（おやぢ）に家を譲ったが、実子ができるとこれにつがせたいと思うのが人情。それに女房や番頭がたきつけるとなると隠居の考えは変ってくる。困ったことに、一旦養子にして関白職を譲ったからは、軽々しく秀次をひっこめるわけにはゆかない。秀次を処分する名義がない。それでデッチ上げたのが謀反ということであった。しかしそれがデッチ上げでは

ない。真実であるというように示さなければならぬ。この必要が普通の処刑ではなく、酷刑を要求したのである。

秀吉は織田信長のように残酷なことをしていいないのでこの一件がとくに目立つ。世間には秀次の方に悪いことがあったように思われるのである。それに生れながらにして史的価値を持つ秀頼を認めなければならぬ。

このような事件は歴史上に沢山の例をあげることができる。何も秀吉ばかりではない。夫婦の愛、兄弟の愛、友人の愛など、愛にはいろいろあるけれども、親子の愛ほど強いものはない。今まで理論的には納得もし、マセた顔をしてオシャベリもしていたが、子供の出産にともない、それが実感となって胸をしめつけられる思いがする。元気で育ってくれることを願わずにはいられない。

ここに私は世間並の、いやそれ以上の親馬鹿であることを告白し、遅まきではあるが、失言した友人とお子様に深く謝罪しなければならぬ。そして今後は不幸にして早世されたお子様方に、心から手向けの追善をしようと考えている。

浄土宗のおしえ <4>

三種行儀について



柴田 哲彦

浄土宗のおしえを修してゆくには、宗徒の心構えとして安心・本願称名念仏を中心とした宗教生活の実践として起行・さらにその起行をより敬虔にして純粹な永続性のあるものにするための四修が説かれておりますが、念仏行にかぎって同じ往生浄土を目的とした念仏でも、称える時・称える処・称える人の状態・等のことによって三種に区別されております。これがいわゆる三種行儀で、尋常行儀（じんじょうぎょうぎ）、別時行儀（べつじぎょうぎ）、臨終行儀（りんじゅうぎょうぎ）の三種であります。これは善導大師が『観念法門』に於て、種々の念仏行を示めされていりますが、これを元祖がうけつぎ、さらに二祖・三祖となるにおよび行儀として確立されたもので、浄土宗徒がいかなる方法で念仏を申してゆくべきかを、具体的に知る大切な行儀なのであります。

第一に尋常行儀であります。これは行儀と云っても特別に定められた行儀ではなく、日常の生活で浄土宗徒が、いかに念仏を申してゆくべきかを示めたもので、元祖が「念仏の行は、もとより行住坐臥、時処諸縁をえらばず、身口の不浄をもきらわぬ行にて候」八鎌倉の二位の禅尼へ進ずる御返事Ⅴと申されて、念仏は何も日常生活をはなれて特別に修さなければならぬものではなく、我々一人一人が自分のおかれている生活の中で「南無阿弥陀仏……」と称えることが往生に結びついてゆくことを説かれておりますが、二祖鎮西上人は『末代念仏授手印』において、さらに明確なものにして尋常行儀とされたのであります。それによりますと「処においては、浄不浄をえらばず。身において、浄不浄をえらばず。衣裳において、浄不浄をえらばず。威儀に於ては、行住坐臥をえらばず。食においては、浄不浄をえらばず。時節においては、久近の時をえらばず」と申されております。つまり、何も清らかな場所でない

とも、身体や衣服が汗や泥などによって、よれていても、たとえ如何なるものを食べようとも、何時、何処で、何をしている時でも念仏が申せるものならば、できうるかぎり念仏を申しなさいと云うことであります。

宗祖法然上人が浄土宗のおしえをお説きになる以前の仏教における修法は寺院の中のみにかぎられていて、一般の民衆がすべて行えるものではなく、したがってかぎられた一部のの人々だけのものでありました。

それが浄土宗がひろめられるようになって、日常の生活の中で宗教生活の実践をいとなめるようになったことは、実に画期的なできごとだったのであります。特に現代の如く政治・経済・社会が複雑化し、それともなう我々の日常生活が多忙をきわめてまゐりますと、毎日のお寺の御本尊様に御参りをして、お念仏を称えるわけにはまいりません。「尋常行儀とは、尋常と云う文字をばよの、つねとよむや」「念仏名義集」と云われるように、我々が自分達の生

活の中で念仏を申せばよいのです。楽しい時もうれしい時にも「南無阿彌陀仏」悲しい時も「南無阿彌陀仏」三度の食事の時にも「南無阿彌陀仏」と云うように、各人各様の生活の中に念仏を結びつけて、さらに念仏による生活をいとなむことが尋常行儀なのであります。

◇ ◇ ◇

第二は別時行儀であります。我々は日々生活におかれておりますが、尋常念仏を修することによって、いつも阿彌陀さまと結ばれ、往生の因をつくってゆくのであります。が、「人の心さまはいたく目もなれ、耳もなれぬれば、いそいとすすむ心もなく、あけくれは、心いそがしき様のみ、疎略になりゆくなり」八七箇条起請文と宗祖が警告されておりますように、所謂、我々はボンノウを具足した凡夫ゆえ、おのずと怠惰に流れがちになるのであります。そこで「その心をためなおさん料に、時々別時の念仏はすべきなり」八七箇条起請文と云われるように別時行儀

の必要性がでてくるわけであります。二祖の『末代念仏授手印』には別時行儀について「処においては、清浄の道場。身においては、沐浴清浄。衣裳においては、清浄の服。威儀においては、常立常坐。食においては一食長斎。酒肉五辛の不浄を、食すべらず。時節においては、若しは一日。若しは七日・十日・九十日」と尋常行儀とは別に、別時行儀として、念仏を修する道場も清め、自分の身体も、身につける衣服も、食事も、清浄なものとし、威儀もきちんと正し、期間も一日とか七日・十日・九十日と云ったように定めておこなうものであることとしております。又二祖上人が「念仏はこれ見仏三昧を期となす。しかるに運く見えたまうがゆえに、疾く見たてまつらんがために別時の念仏を用いるなり」八西要義と述べられ、三祖上人が「正しく念仏する時は心には仏見えたまへ、口には南無阿彌陀仏なり」「浄土宗要集總書」と同じく述べられているように、平生、多忙な生活の中における念仏では、見仏など

とうてい望むべくありませんが、しかし
すべて清浄な状態において修す別時行儀で
は見仏も期待しつつ念仏を申すのであり
ます。

このように考えてみますと、たしかに淨
土宗のおしえによる念仏はいかなる人々で
も実践が可能な尋常念仏に特色があり、又
重要視されてもおります。しかし我々の心
はすこぶる緩みやすいものでありますので、
その心と行を策励する意味においても別時
行儀は大切なものと云えましょう。これは
スポーツ選手が自分の種目だけでトレーニ
ングするのでなく、たまに専門外の運動を
して心身の策励と気分転換をはかるそうで
すが、尋常と別時との関係もこれと対比し
て考えてみるのもよいでしょう。ともかく
現在の我々の生活は別時を持てる機会が少
いことはいなめません。しかし、だからと
いってそれで見すごしてよいものではあり
ません。積極的に別時行儀の機会をつくる
よう努力すべきであります。

◇ ◇ ◇

第三に臨終行儀であります。生者必滅と云
われますが、いかに健康な人でも一度は臨終
の時を迎えなければならぬのであります。
臨終は人生の終りである厳肅な瞬間であり
「一期の大事これに過ぎたるは無きなり」
△念仏名義集△と云われているように念仏行
者にとっては阿弥陀様の来迎を受けて往生で
きるかどうか重大な瞬間なのであります。で
ありますから行儀は別時と同じく清浄をたも
ち、「念仏の行者は西に向い、極楽の仏は行
者の前に来りたまう。これによって念仏の行
者は、われを迎えんがために、仏来りたま
り。われ決定して往生すべしと西に向い、本
尊をうやまい、本尊は西にまします。われ仏
にしたがって西に往くと思ひて、声を絶たず
無間に相続して、申すべきなり」△西宗要△
と二祖上人は臨終行儀の相を説いていらっし
やいます。しかしこのような行儀としてすべ
て満足したかたちをもって臨終を迎えること

のできる人はよいのですが、宗祖上人が
「人の命は食事のとき、むせて死すること
もあるなり」△四十八巻伝第二十一△と申
されているように、我々はいつなんどき臨
終を迎えるかわかりません。万が一急に臨
終となったとしても、あわてないよう平生
の念仏において一瞬一瞬が臨終であると云
う気持を持つことも大切であります。「平
生の念仏、臨終の念仏の、死ぬれば臨終の
念仏となり、臨終の念仏の、のぶれば平生
の念仏となるなり」△念仏往生要義抄△と
宗祖上人も申され、いかなるかたちの臨終
でも臨終行儀をなし得ることができるとさ
れております。以上三種行儀について述べ
てまいりましたが、我々がこれにのっとり
て念仏生活実践に励むことによって宗祖法
然上人が「いければ念仏の功つもあり、しな
ば浄土へまいりなん、とてもかくても、こ
の身には思はずらうことぞなきと思ひぬ
れば、死生ともにわずらいなし」と申された
心に、一步一步近づいてゆくのであります。



白石広祐

夕刻百万の紅衛兵をかきわけてホテルに帰ると中日友好協会の書記長趙安博氏が来訪しロビーに一同集りて座談会を催す事になった。

趙氏の丁重な歓迎の辞につづいて型の如く中国革命の意義と文化大革命の内容に関し永々と説明があり一同うんざり拝聴させられた。「文化大革命とは毛沢東思想の学習によって四旧打破を實行することにあります。四旧打破とは古い思想文化風俗習慣を打ち破り毛沢東思想に照して新しく一切を改革して行くことであります。」例によって勇しく長々続く説明は型にはまって私は初年兵時代にかされた中隊長のお勅諭の講義を想い出していたが、二時間として自由討議になり色々質問応答が出た。私は立って「私は日本の一仏教徒であるが新中国に宗教はないと暫々きかされて来たがその点実状は如何ですか。」趙氏曰く「我が国の憲法には如何なる宗教を信する自由も又信じない自由も保障してあります、然し正統なマルクスレーニン主義を信奉する吾々は矢張り宗教はアヘンであると云う信条に立ち人民教育思想改造を行っておりま

すので宗教はアヘンや麻雀と共に追放せられて現在革命の進行を妨げておりません。」これもきまり文句の御答弁に私は再び立って「宗教は暫々アヘンであつたが正しい仏教はさに非ず、念仏信仰は私にとって生命そのものであります。しかもその仏教なり念仏なりは中国古代の聖者達によって我が国に伝えられ我々は中国を印度と共に魂の故郷として慕いあこがれておるのである。今回は残念乍ら洛陽西安天山等を廻る事が出来なかったがそこには沢山の仏蹟文化財があり、それは唯に貴方々のみの宝物でなく等しく世界人民の共有の宝物文化財であると思う。これらを文化大革命の名によりみだりに擲う失うことは我々日本仏教徒にとつて耐え難い恨みである。日中友好を念願せられる貴国人民のお考へは如何であるか。」と切り込んだ。趙氏曰く「お説御尤も、中国は世界人民との友好を望むと共に我々の祖先が昔有した偉大な文化は是を尊重するものであり、世界人民の為に夫等の文化財は手厚く保護する方針であると云う事をはっきり申し上げたい。」とこれで一同も納得して問答は終った。常識を超越し

た共産革命も偉大な祖先の業績は一応是を尊重して損傷せぬとことに安堵したものだ。

同夜は映画館へ案内されて宣伝映画「紅衛兵と毛主席」その他原爆実験の美しいカラー映画でタッブリしこかれて一同ぐったり参って仕舞う。

翌十二日は近くに北京六中を訪れて紅衛兵の精鋭と座談会を行なうことになった。その様子は毎日新聞の宇佐美記者が詳細に報道しているが一部を転載させて貰うと「仲間（小生）の一人がこうたずねた。『各地をたずねて皆が毛主席を愛し、彼の思想を学習していることを知ったが、日本では毛さんは神さまではないかと思っている。スターリンの個人崇拜とどう違うか。何故熱愛するか。毛思想の核心はなにか。』」答「毛主席は神様のようだというが私たちは神様よりもえらいと思う。

神は伝説的にどうこういうだけだが、毛主席は全中国を解放し幸福にさせた。これは神様にはできないことだ。」この言葉に一同さすがにため息が出た。「どこかの政治家に聞かせてやりたい。」という人もいた。毛主席は神仏よりも偉大なりと紅衛兵はまなじりを

あく「一行の中の浄土宗の僧が即興でものした三十一文字である……」。

つづいて毛沢東思想は現実に即して伝教や儒教よりも偉大であり我々にとって「心の赤い太陽であり、我々は毛主席を熱愛し彼に反対する者とは命がけて戦うこの様な状況で紅衛兵が組織された。目的はビルジョア思想を持ちこれを復活させる実権派との戦いであり、古い教育、文学一切を改革し、新しい思想文化をもたらしことである……」。

「歌うような調子でしゃべるこうした熱狂的な一遍倒な調子は新興宗教の信者の中で見られる態度や敗戦前の我が国の愛国者達にも見られた馬車馬的なものでその純粋さに感心したりうんざりしたり恐れ入ったり複雑な感じだ。同日は午後三時に北京人民大会堂における孫文生誕百年祭式典に参列したが式典の前に会場横の湖南の間で党、政府指導者と共に記念撮影をした折毛主席と林彪だけが姿を見せなかったのは何故だろうか。周恩来、劉少奇、宋慶齡、董必武、何香凝……、正に文武百官綺羅星の如き壯観と云へばよからう。会場には孫文の大字真を飾り、周首相を始め巨星の祝辞

は七カ国語に訳されて同時に放送され、自席のイヤホンで我々は不自由なく聞きとることが出来た。一万人の大会衆と、七億人民を指導するスター連の雄姿は惜しみなく我々のカメラに収められた。十三日は早朝出発友誼商店に土産物を求めて飛行場に到り零時半中国民航のプロペラ機で離陸一時間して済南空港に着陸三十分休憩南京に向う……ミグ戦闘機くろくろ並ぶ空港に降り立ち思う我が古戦場……

二十年前鉄砲かいついで二年間ウロウロ歩いたこの山東省と思へば野も山も皆なつかしく感慨無量、往時夢の如し……美しく耕された津浦線の沃野涯なくつづけよ平和……やがて雲間に鋭き峰を現した泰山はあれぞ空しく死んだ戦友の墓標ぞと心を込めて機上より十念回向する。機は四時南京空港着、気温は十七度で北京より大分暖かい。中国ではどの都会も、日本より美しいが特に南京は革命後に植えたポプラ並木がよく育ち街のロータリーも菊の花壇で美しく飾られて人民の心の豊かさを象徴している様だ。この美しい街で帝國陸軍による三十万人の虐殺が二十八年前に行

はれた事実は信じられないが或る地区で古い木を切り倒すと今でも赤い血が出るなど言い伝えられているようだ。

南京では西花園も訪問孫文先生が大總統になつて執政された頃の居間その他見学、揚子江を船で一時間も下り建設中の長江大橋を見る。これは長さ六千国道と鉄道を重ねた二重橋で江流の中央二軒は未完成だがあと二カ年位で完成するだろう。長江は五千年の歴史を秘めて黄濁しつつ流れている。

それから南京化学肥料人民公社に向ひ公社の社宅を訪れ各家庭に別れて太々細君達と個別に懇談して一般工員達の生活について見たり聞いたり学習するが何れも革命後の生活の安定と毛沢東の偉大さを強調し涙まで流す。公社の託児所や幼稚園では可愛い子供らの大観迎を受けてこちらも涙ぐんでしまう。何とその無心なことよ。日本の子供の様にコマチャクレたのはおらないのだ。

昼食は公社で御馳走になり再び船で市内に戻り午後は南京人民大会堂に於ける孫文百年祭式典に参加後捕つて郊外紫金山の中山陵を訪れ、解放軍で楽隊の吹奏楽の裡に墓前に花

環を捧げて恭しく一同参拝出来たのだった。

蔣介石の国民党が作った中山陵は秋空高く四百段の石段の上に聳えて美しく何の変改も加へてなかったのは我々にとつても快かった。

翌十五日は早朝南京駅を立ち汽車で上海に向ふ。東窓風景は概ね内地の農村に似ているが無錫鎮江蘇州と支那事変で耳に親しかった地名は無関心で通り過ぎるには忍びぬものがあつた。上海駅で紅衛兵の大歓迎のうちにバスで和平飯店に入る。ここは昔のキャセイホテルで豪華を極めたものだが入口にも外壁にも一面壁新聞が張りつけられて痛ましく小さくなっている感じ。食堂の夕食には鯛の刺身にすぎやき卵焼に味噌汁と並んで一同大喜び、街に出かけてお土産品をたっぷり仕込むなど皆里心がついて忙しい。十六日朝は郊外の朝陽新村（団地）に出掛けて工人村を訪れ美しい住宅街に託児所や幼稚園を見学、工人家庭に別れて入り込み家族と歓談しつつその生活をよくわしく見聞する。テレビや自家用車はないが安定した堅家な希望多い生活だと皆が感心する。午後は閩北に少年宮を訪れて皆びっくりこんな施設は日本にはない。

一月に二千名の少年が利用する少年宮は上海だけで十カ所、学童が楽しいクラブ活動をする所であらう設備が用意されて子供らは無心に唱い踊り学んで時の経つのも忘れてゐるがその間にもアメリカを打て台湾を解放せよの宣伝教育は少しも忘れていない。

◇ ◇ ◇

十七日は孫文先生の旧居を見学した後空港に到り、バイカウント機にて二時間半で広州に飛びホテルに立寄つて市内見学に出かけ、五千七百人の革命志士が処刑されたという烈士の墓陵や経済貿易博などを見て歩く。

十八日は早朝広州を辞去して国境の深圳に着いたのは正午近く、手続き終り半月の行動を共にした四名の通訳諸君とも別れを惜しんで国境を越えた。

それから九竜のホテルにつき同日は香港見物、翌日は水中翼船でマカオに赴き国際賭博都市の実態を視察、中国との国境のきびしい警戒を見て同夜啓徳空港から羽田へ三時間十分で無事帰国した。（了）

絵	連
話	続

みんなの法然さま

— 配流の師 —

高橋良和

さしえ 小林健造



建永二年二月二十八日のことであった。

梅の花もほころびかけたこの日、突然法然上人にたいへんな事故がおこったのである。

吉水の庵室の法然上人のもとにその当時の右大臣中原朝臣（なかはらあそん）からの使いがきたのである。

なにごとがおきたのだろうか、

いわれるままにこの右大臣の館に赴いた法然上人にきびしい命令がくだったのである。

法然房あなたのすすめる念仏で世のなかさがわがしくなったことを御存知か。

右大臣の朝臣にはじめもの腰もやわらかく、こうたずねたのである。

わたくしのすすめますおしえて世のなか、さがしくな

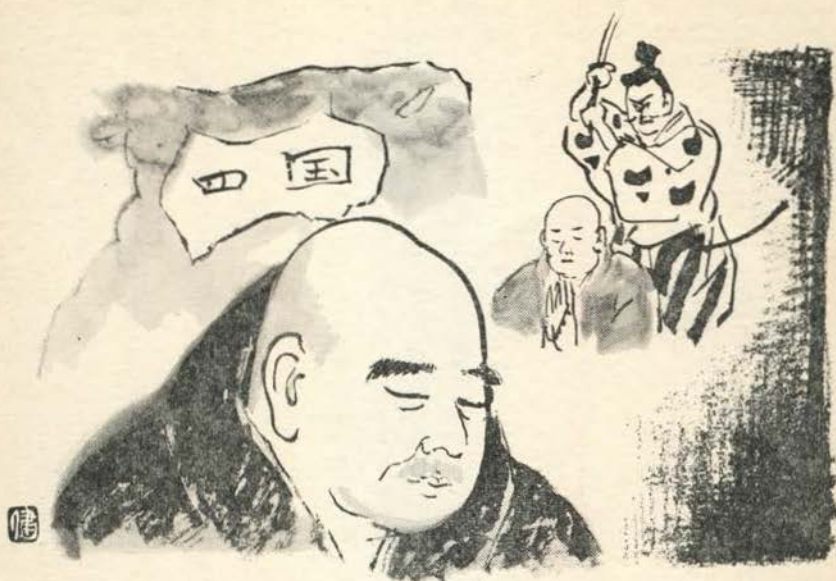
ったことは存ぜませぬが、弟子のものたちがいたしたことでございますか、

法然上人はきびしい顔つきでたずねたのである。

それだ、あなたの弟子の住蓮、安楽なるものが御所の女官を出家させたことで、御所のなかは大騒動になった、その責任は如何に。

そのことはよく存じあげております。弟子のいたしましたことは、その師匠の責任でございますれば、如何ような処分でもわたくしにとりましては、不足はございません。

そうか、その覚悟ならよいが、それよりどうか、もし、あなたが、念仏を弘めることをやめるといふのなら、またはなしは別で、処分のことを取りやめることもあるが、どうか。



右大臣朝臣のこのことを聞くと、法然上人の顔にぎゅっとひきしまったような感じであった。

そのお心もちまことにうれしく存じますが、もはやこの念仏のおしえは、水の低きにつくごとく、今京洛の地ではどの人々も、この念仏によって救われているのでございます。でありますから、如何なる事をもってしても、とどまるものではございません。

厳然といい放つ法然上人の顔はこうこうと輝き、千万人といえども吾れ任かんの決意があらわれていた。

そうか、それならいたしかたのないこと、弟子の責任をあなたがとらねばなるまい、いいか。

はい、後悔はございません。

なんとかしてこの法然上人をたすけたいと思う右大臣朝臣も、遂に法然上人のこのびくともしない信念にやむなく、その処分を決めたのである。

まことにお気の毒であるが、あなたは京都をはなれて遠い四国の地に流罪になってもらわねばならないが、心残りはないか。

はい、この老令のわたくしには、なにも心残りはございません。どうぞ処分をしていただきたいと存じます。

あたりはしーんと静まったなかに、朗々と読みあげる法然

上人流罪の宣下が決まったのである。

あなたは釈尊のみ弟子であるから、仏法さかえるこの土において、そのみ弟子であるあなたを処分するのは申しわけがない、それであなたの名前を、仮に、在家（さいけ）の人の名をつけて今流罪を申しわたしておく。

そういうながら読んだこの処分の内容は、藤井の元彦（もとひこ）あなたは四国の土佐に流罪する。

というのであった。法然上人を藤井の元彦と呼んで、僧侶でないようなかっこうで、この処分が決まったのである。肌さむい二月の寒さはこの法然上人に如何ばかりこたえたであらうか。この処分を聞いてなげき悲しんだのはその門弟と、信者である。七十五才のお年で、遠い土佐の国に赴かれる法然上人にもしものがあつてはたいへんである。

法蓮房信空（ほれんぼうしんくう）がいったのである。

とたんその度にいる門弟たちから期せずして同じ声が出た。なるほど安楽や、住蓮は御所の女官を出家させたが、もうすでに処刑されていること、もしこのときにお師匠さまが、わたしは念仏のおしえを弘めることをやめますと、ひとことおつしやっていたら、流罪にならずにすむものを、おのおのそうは思わぬか。

いや、その通り、お師匠さまが、念仏を弘めることをやめ

るとおつしやればすむこと、どなたかお師匠さまにそのことを申しはくださらぬか。

それなら法蓮房がよいだろうということになって、おそるおそる法蓮房が法然上人にそのことを申ししたのである。

お師匠さま、弟子のことをお思いくださって、念仏のおしえを弘めることをやめるとおつしやっていただけませぬか。このことばを聞いた法然上人の顔はまるで法蓮房をにらみ

つけるような強いまなざしで、

なんとということか、わたしは流罪の刑は決してうらみとは思っておらぬ。わたしはもう八十才に近い、一度は死ななければならぬ身である。ここであなたがたと別れても必ず極楽の蓮の花の上でお逢いすることはたしかである。京都にずーといるからせめてこの機会に田、舎の土地にいつて、まだ念仏のありがたさを知らぬ人々に、そのおしえをつたえたいのであるから、決してうらみにも思っておらぬ。よろこんで土佐の国に行くからこれを陛下の御恩と考えている。このようにきっぱりいきったのである。お師匠さまもったいのうございます。席にいる人々の口から思わす。お念仏の声がもれたのであった。心配しないで欲しい、わたくしは遠い四国にみのりを弘めにゆくのである。法然上人の顔は更にひきしまった感じであった。

一隅を照らす

たたずまい

法隆寺金堂天蓋の楽天



鑑賞するひとが知ろうと知るまいと、一芸に秀でたものの、陰れた部分まで丹念に手を入れる。やがては塗りつぶされる部分であろうとも、まことの工匠は手を抜くことをせず、大切そうに磨きあげる。この陰れた精神が、建物を、その人間をみことに作りあげる土台になっている。巷間の庶民のなかにこそ陰れた仏のいることを暗示している。

法隆寺の金堂に入って、釈迦三尊を拜むと、あの恐ろしいまでの強烈なすがたに圧倒されて、息を抜くことすらできない。その印象に驚いて金堂を去るのが普通であらう。ところが、その金堂の天蓋

に音楽を奏でる天人たちが、本尊とはうってかわって、やさしくたむろしていることを知れば、またも驚きがますますことだらう。強さと優雅さのコントラストの妙も心にくい。それよりも何よりも、この天人は誰でもが安心して手放して眺められる、なにか心のふるさとに連がる思いがする。仏性（ぶつしょう）というものはそういう世界ではないだろうか。まことに一隅を照らし、その仏性に気づかないのは、わたくしたち人間のがわにある、ということを具象的に示している思いがする。いつ眺めても、ほのほのとした思いに包まれる天人のすがたではある。

（右上善応）

真 野 正 順 著

新刊 日本人の信仰と生活

B 6 判 356 P
価 700 円 770 円

昭和のはじめの国家主義の嵐のなかにあつて真の日本人の在り方を示すため、仏教的ヒューマニズムをおしすすめ、また戦後の混乱期において、新しい日本人の精神生活に礎をあたえた筆者の、仏教者としての信仰と人生観のあふれる遺稿のかずかずをまとめた珠玉の随想録

内 容

- 第1章 香を焚く 第2章 生活を強く美しく
第3章 先聖行ける道 附 真野先生を偲びて

発行所 法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田橋1-11-6 振替東京 82187

新刊 大正大学教授 竹 中 信 常 著
文 博

日本人と仏教

定 価 600 円
770 円

日本人の宗教観を大きく高く展開させた法然上人の教へと信仰を明示した本書は人間と念仏を復興させる巨大な灯である

教育新潮社 発行

希望者は本会へ申込み下さい

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

(送料 六円)

会費一カ年 金七二〇円

(送料 不要)

浄 土 四 月 号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和四十二年三月二十五日 印刷
昭和四十二年四月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式
会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四番

振替東京八二一七番